＊湘南遺産プロジェクトHP＊

湘南の由来
ショートショート
第1話

“湘南”という地域呼称はどこから来たのか？ その疑問に迫るショートショートの第1話

えと文 和田精二 2020,2,20

しょうしょう

1-1 瀟湘湖南と瀟湘八景図

日本における“湘南”という地域呼称は
中国･湖南省の伝説と神話の地
“瀟湘湖南”に由来する、
･･･という説を検証する。

“瀟湘湖南”とは
中国は湖南省に存在した長沙国の
洞庭湖に注ぐ2つの川
湘水（湘江）と瀟水が合流する辺りの
地域を指す。

湖南省を流れる湘水
の神とされる湘夫人

この地域は単に風光明媚というだけでなく
桃源郷伝説や神話が生まれ
屈原・李白・杜甫などが賛美したように
当時の中国人にとって羨望の地であった。

士大夫

貴族文化が栄えた“唐”の時代が終わり、“宋”の時代が訪れる。

宋代に中国文化の理想的な形が出来たと言われるのは、
この時代に本格化した官吏登用制度“科挙”によるところが大きい。

科挙を通った高級官僚で、新興地主かつ儒教的教養を
身につけた文人を“士大夫”と称した。

士大夫

士大夫は文人のたしなみとして、読書・詩文はもとより 書画・琴・茶・庭園などを学び、あらゆる面で最高の能力をもつことを理想とした。

彼らは自らのあり方を問い、その精神を反映させる新しい芸術を求めた。
唐代までの画家が追求した華麗な美の世界に代わる質朴の美を追求した結果として、士大夫思考に基づく“水墨山水画” の世界にたどりつく。

宋迪

水墨山水画の世界にエポックな人物が登場する。
瀟湘の中心都市 長沙に北宋から赴任して来た文人官僚の“宋迪（そうてき）” という人物。

彼は瀟湘湖南の景観を 8つの代表的な画題にまとめて“瀟湘八景図” とする 新しい絵画形式を案出する。

四季や朝暮に変化する自然の様相を、洞庭秋月、瀟湘夜雨などの八景に凝縮したのである。

牧谿

新しい絵画形式“瀟湘八景図”は当時の人々の心をとらえてブームとなり、一般の層にまで広まっていく。

多くの画家や士大夫に加えて禅僧も新しい画題に挑戦する。
画家としても著名な禅僧“牧谿（もっけい）”や“玉澗（ぎょくかん）”も加わり、幾多の“瀟湘八景図”が描かれる。

牧谿“瀟湘八景図”の内の“漁村夕照図”

玉澗“瀟湘八景図”の内の“山市晴嵐図”

そして、“牧谿”と“玉澗”の筆による歴史に残る不朽の名作、“瀟湘八景図”が誕生する。

牧谿と玉澗の瀟湘八景図は、やがて海を渡り日本に渡来、我が国の画壇に大きな影響を与えることになる。

インド僧 達磨に始まった中国禅

禅は6世紀にインドの僧 達磨が中国に渡来して始まり、中国禅として唐代から宋代にかけて発展する。

禅宗は、宋代になると士大夫層に受け入れられ、民間に広まっていた浄土宗とともに中国仏教の主流となる。

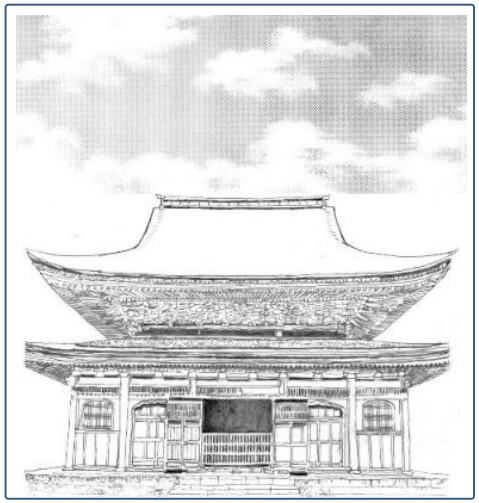
中国禅が士大夫に広く浸透する一方で 禅僧も士大夫文化の影響を強く受ける。

その中国禅とともに日本にやって来たのが“瀟湘八景図”である。

しょうしょう

1-2 禅文化と瀟湘八景図

1168年、中国での修行から戻った“栄西”は、臨済禅と茶を日本に伝える。
帰国後、京都で活動するが、比叡山から異端として迫害を受けて断念、
北条一族が歴史の前面に躍り出た鎌倉に向かう。



円覚寺舎利殿

厳しい戒律の制度をもつ禅の精神は武士の精神とぴったり合った。

やがて 中国様式の禅寺がつくられ、鎌倉五山や京都五山が
隆盛の極みへ向かうことで、臨済宗が勢いづいていく。

“禅の中世”の開幕である

日本における“湘南”ブランド
名付け親第1号の夢窓疎石

円覚寺、南禅寺など五山の住職に8度就任、後醍醐天皇などから国師の号を7度も賜った臨済宗の高僧“夢窓疎石”。

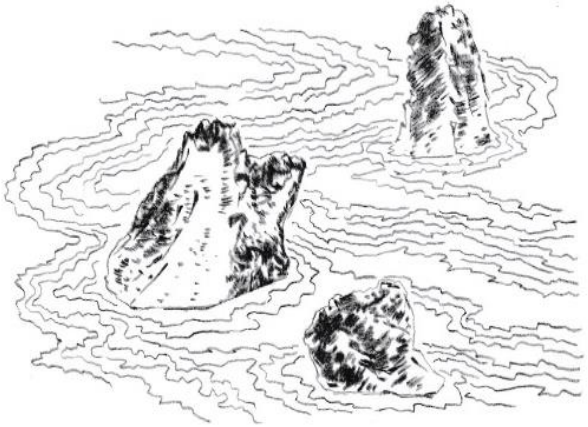
作庭の達人でもあった疎石は“枯山水”の様式をつくり、西芳寺（苔寺）庭園内に設計した休憩所を“湘南亭”と名づける。

この呼称“湘南亭”が日本における“湘南”ブランド”第1号となる。

商業的な目的で渡航する禅僧も
少なくなかった

鎌倉時代に盛んになった日宋貿易は室町時代にさらに発展、足利幕府は日明貿易で大きな富を築く。

一方、臨済宗派も室町時代の日明交易や文化交流などを独占し、莫大な収入を得て、幕府の強力なスポンサーとなり、五山文化を国内に浸透させていく。



自然をモノクロ感覚に凝縮する枯山水。
水なしで水を感じさせる発想は中国にない

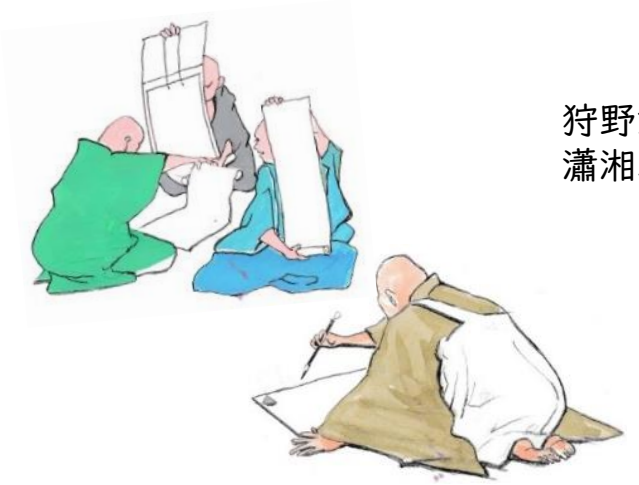
書物を著し、絵で表現し、庭園や建物をつくっていく日本の禅文化は中国の禅文化の色濃い影響を受けながら日本独自の発展を遂げる。

五山において日本の漢詩や水墨山水画が花開いた様に、建築、作庭、茶の湯、生け花、能などの禅文化も開花していく。

金閣寺を建立し世阿弥を重用した足利義満以降、茶礼、立花、能楽が盛んになっていく

足利将軍家は宋から輸入した“牧谿”と“玉澗”の“瀟湘八景図”の巻物を4幅ずつ裁断し 茶会用の掛軸に改変、東山御物として愛蔵する。

掛軸となった牧谿と玉澗の瀟湘八景図は、織田信長、徳川家康、豊臣秀吉などや豪商間をうつろい、瀟湘八景図の名声が国内に浸透していく。



東山文化成熟と共に水墨画も日本的に変化する

狩野派 などの画家が好んで瀟湘八景図を描いたように、五山の禅僧も瀟湘八景図 を描き、詩文を書いた。

瀟湘八景図 を好んで描く画家や禅僧たちの心の中に異国の名勝地“瀟湘湖南”を憧憬する精神が芽生える。

近江八景

金沢八景

“瀟湘八景図”がきっかけとなり、日本の名勝地を見直す機運が発生する

興味深い現象として、“瀟湘八景図”がきっかけとなり、国内の名勝地を日本人の目で見つめ直す気運が発生。

瀟湘八景にならって“近江八景”や“金沢八景”などが誕生、これまで全国に963箇所の“八景”が生まれる。

イメージとしての“瀟湘湖南”の名勝価値が“瀟湘八景図”の力を借り、静かに日本の中に浸透し始めたのである。

【参考1】

作家	画題	所蔵先	指定	伝来
牧谿	煙寺晩鐘図	畠山記念館	国宝	松永久秀　織田信長　徳川家康 紀州徳川家　加州前田家
牧谿	平沙落雁図	出光美術館	重文	豊臣秀吉 上杉景勝 徳川秀忠 松平忠直
牧谿	遠浦帰帆図	京都国立博	重文	織田信長　他
玉澗	山市晴嵐図	出光美術館	重文	中屋壮悦　大友宗麟　豊臣秀吉 金森可重　松平治郷

牧谿と玉澗の“瀟湘八景図”の伝来の例

現在、“牧谿”と“玉澗”の掛軸10点が現存、国宝や重要文化財として鑑賞できる。

足利義満

【参考2】

雪舟・秋冬山水図

長谷川等伯・松林図屏風

日本の水墨画史に燦然と輝く巨星“長谷川等伯”と“雪舟”。

ふたりは 牧谿と玉澗に異常なまでに執着し、狂気じみた情熱を感じさせる作品を残している。

長谷川等伯像

1-3 西行の登場

“西行”抜きで湘南の由来は成立しない。

平安から鎌倉、貴族文化から武家文化へ時代が大きく変化する。
変化にともなう喜怒哀楽と栄枯盛衰のはかなさが重なるにつれ、
権力や財産を捨て山裾に庵を結んだり 旅を住処に仏の道に近づこうとしたり
世をはかなむ生き様を美意識として高めようとする人々が出て来る。

西行

“遁世”、“出家”、“遊行”といった言葉がはやり、社会現象となる。

代表的な人物が、歌枕を巡り諸国を遍歴した“能因法師”であり、
武家を捨てて歌に遊んだ“西行”である。

“西行” 抜きで“湘南の由来”ストーリーは成立しない。

世阿弥“西行桜”

一遍上人

芭蕉

その西行を追慕し、諸国を遊行する人々が殊の外多かった。

“一遍”は西行を遊行の先駆者として尊敬し、
“世阿弥”も西行を主人公に能をつくり、
“芭蕉”は西行を真似て日本中を旅した。

世をはかなむ生き様を美意識として高めようとする
人々にとって、西行の存在はとてつもなく大きかった。

崇雪

大淀三千風

西行信奉者はわれわれの身近なところにも存在した。

西行寺の建立を目指し大磯に移住した小田原の俳人
“崇雪（そうせつ）”、
鴫立沢を西行に因んだ名勝地にするべく注力した俳人
“大淀三千風（みちかぜ）”。

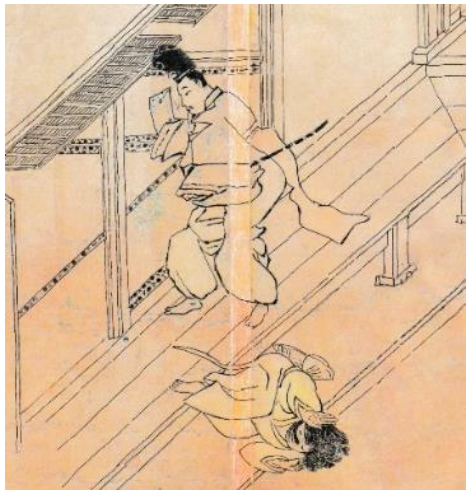
“湘南の由来”に直結する人物が登場して来る。

北面の武士

京の御所における上皇の警護兵を“北面の武士”という。
彼らは 馬術、弓術の他、和歌、詩文、管弦、歌舞の心得まで要求された。

後に西行を名乗る“佐藤義清（のりきよ）”も そのひとり。
荘園領主佐藤康清の息子で流鏑馬（やぶさめ）や蹴鞠（けまり）の達人。

もうひとり、“平清盛”も西行と同じ北面の武士で同い歳。
ふたりは 運命的に絡んでいくことになる。



娘を縁下に蹴落とし家を出る西行（西行物語）

能因法師

西行23歳の時、佐藤義清の名を捨てて出家、円位を名乗る。

西行は陸奥（みちのく）を目指し旅に出る。
尊敬する“能因法師”が訪れた歌枕の地を自ら巡り、
歌の道を極めるのが目的であった。

西行

陸奥へ赴く途中、西行が“湘南”で詠んだとされる歌

“心なき身にもあはれは知られけり 鴫立つ沢の秋の夕暮”

この歌を詠んだのは 西行が初めて陸奥を目指した旅。
西行が鴫立沢でこの歌を詠んだという大磯住民による
西行伝承を、室町時代の僧“道隆”が紀行文“廻国雑記”
に記している。

平清盛

平家に逆らう奈良の僧兵に対し“平清盛”は息子重衡に南都攻略を命じる。

この戦いで重衡軍の放った火により東大寺の大仏殿が1,000名以上の僧とともに焼け落ちる。

仏教徒にとって象徴的な存在だった廬舎那仏（るしゃなぶつ）の焼失は、民衆にとって精神的喪失感が大きく、 平家凋落の先駆けとなる。

重源上人

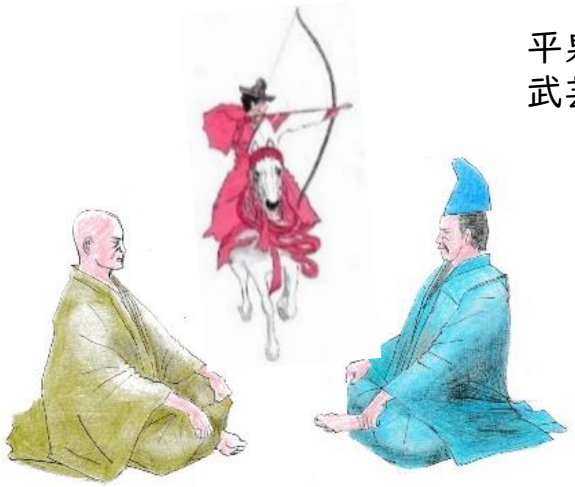
大仏殿再興は国を挙げての事業となり、高僧“重源（ちょうげん）”に大仏殿勧進（寄付獲得事業）の命が下る。

復興に情熱を燃やす重源は伊勢の庵に西行を訪ね、大仏の鍍金用砂金の提供を平泉の“藤原秀衡”へ依頼するよう懇請する。

藤原三代（清衡、基衡、秀衡）

重源の懇請を受けた69歳の西行にとって、奈良・平泉の往復は死を賭けるほどの難行であるが、

晩年の西行は、歌道よりも仏道・神道に傾斜していたこともあり、重源の願いを快く受けて伊勢を発ち、陸奥に向かう。



流鏑馬の極意を指南した西行。

平泉に赴く途中、鶴岡八幡宮に立ち寄った西行は 源頼朝と会い、夜を徹して武芸や和歌について語り合ったと“吾妻鑑”にある。

なぜ西行は頼朝に会う必要があったのか？

砂金運搬の安全確保は頼朝の支援抜きで難しい一方、頼朝が勧進先“秀衡”の討伐を策している、という屈曲した難題が存在した。

事実、西行の勧進達成後２年にして、頼朝は秀衡の後継“泰衡”を攻め滅ぼし、大仏殿の再建も果たしている。
秀衡の勧進額5,000両に対し頼朝は1,000両だったという説もある。

世阿弥は西行を追慕し、能“西行桜”をつくった。

大仏殿勧進の成功は西行の評判をさらに押し上げる。

“ 願はくは花の下にて春死なむ そのきさらぎの望月のころ ”

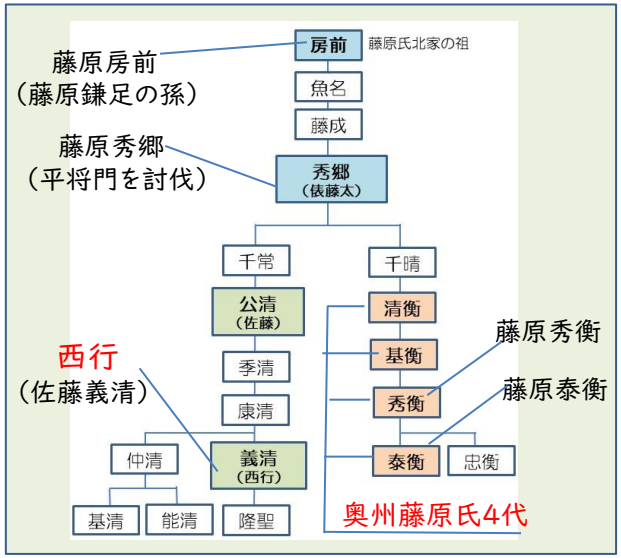
西行は、遺言のような歌の通り、大仏殿勧進の3年後、
釈迦の後を1日遅れで追いかけるように没し、人々を驚かせる。
享年73歳。

運慶作の“無著”のモデルは西行だったという学説がある。
西行や重源と共に運慶も東大寺の再建に積極的に参加したという史実等から推定している。

西行の死後も人の心に西行が生き続ける。
西行の言い伝えは西行物語や 選集抄などにより伝承されながら
諸国を遍歴し“西行伝説”として全国に根付いていく。

やがて西行伝説は 西行精神として一遍や世阿弥などへ
引き継がれて行き、“崇雪”や“大淀三千風”に達したとき
いよいよ湘南の由来に結びつくことになる。

【参考3】



西行系図

西行に白羽の矢が当たったのは、家系を見ると理解できる。

藤原秀衡と対峙できる人物は 西行以外に存在しなかった
ようである。

【参考4】

【参考】“西行”の足跡

西行は陸奥に向かう途中、“湘南”に2度立ち寄っている。

1度目は能因法師の歌枕を巡る旅で、30歳の頃、

2度目は大仏殿勧進の旅で69歳の時である。

【引用文献・資料】

8：湘南遺産HP “湘南の由来とエリアを探る”その6
12：湘南遺産HP “湘南の由来とエリアを探る”その17を模写
14：葛飾北斎「浅瀬」と「渦巻水」をコラージュ
17：湘南遺産HP “湘南の由来とエリアを探る”その5
18：湘南遺産HP “湘南の由来とエリアを探る”その6
19：湘南遺産HP “湘南の由来とエリアを探る”その6
25：“西行物語絵巻”の部分図を模写・修正
28：湘南遺産HP “湘南の由来とエリアを探る”その14
34：湘南遺産HP “湘南の由来とエリアを探る”その14

❖第1話 完了